

「ナイロン・ザイル事件」の行方

小説「氷壁」の舞台裏



小説のあらすじ

今、朝日新聞朝刊に連載中の「氷壁」はなかなか若い人たちの間に好評であるという。

作者は御承知のように井上靖氏しばらく毎日新聞の記事をしただけあって、氏特有の調べた小説、しかも氏が断ると否とにかかわらず二種のノン・フィクションだ。

そしてこの小説のようにナイロン・ザイルという一種の商品をテーマにして追求したものは珍らしい。次にこの小説の背景となっている「事件」を探ってみよう。

「昭和三十一年元日の未明、魚津恭太と小坂乙彦は奥穂に登ったが二人を結んでいたザイルが切れて小坂は雪の海に落ちていった。切れたナイロン・ザイルは、魚津が勤める『新東亜商事』の親会社で

切れないはずのザイルがなぜ切れたのか——魚津をみる多くの人の眼には、そういう疑惑が光っている。……(略)

ナイロン・ザイルが切れるかどうかを試す衝撃(反応実験(略))の日ザイルはついに切れなかった。そんなはずはない、ザイルはたしかに切れたのだ、魚津は、うめいた。いま、魚津の周囲は、ことごとくが敵であった。」

これが昭和三十二年五月一日付朝日新聞の連載小説「氷壁」(井上靖)のあらすじ(抜すじ)である。

一方、手許にこの小説の土台となったナイロン・ザイル切断事件のあらましの一端をのぞかせる次のような資料がある。

実説「氷壁」のすべて

「三十年一月一日、予定されていた計画の一つである前穂高岳東面の絶壁(高距約二百米、前穂東壁と呼ばれている)に、リーダー石原国利、若山五朗、沢田栄介の三名が登攀を試みた。同日は頂上直下約三十米の地点で日没のため登攀続行が困難となったので、かねてその時のために用意して来たツ

棚で一夜を明かした。

翌二日朝、石原は岩溝を登り頂上に突き出した岩の下まで登り、岩に手をまわしてザイル(登山綱)をかけ、足をすべらせても落ちないようしておいて、この突き出した岩の上に出ようと努力したがうまくゆかず、やがて腕も疲れて来たので、二番目の若山と交代しようともとの岩棚に下りた。若山は岩溝を登り、石原同様突き出した岩の上に出ようと思つたが、困難であるので右側の岩を登って上へ出ようとし、右側の岩を試みたがこれも困難なものと戻ろうとしたとき、若山は足を滑らせた。ザイルが上の岩にかかっているので当然ぶらりと下がるだけであるが、若山はアツという声を残し、石原の左足にふれてそのまま足下の絶壁に姿を消した。不思議に感じた石原はすぐさまザイルをたぐり寄せてみるとザイルは切断していた。(略)……(若山の遺体は三十年七月三十一日発見された。)

これは昭和三十一年六月二十二日、石原国利(中大生)が原告となり、篠田軍治(阪大教授)を被告とした告訴状の一部である。

一読してわかるように「氷壁」の一部と訴状にのべられている情

というよりは、同一事実と見た方がよいかもしれない。「氷壁」のモデル・ケースといわれているゆえである。このナイロン・ザイルをめぐる告訴事件は、当時各新聞にも取り上げられ問題視されたものである。好評のうちに進められている「氷壁」の舞台裏をのぞく意味で、ナイロン・ザイル事件をもう少し探ってみよう。

前記の三登山家の属していた登山クラブ岩稜会(三重県鈴鹿市神戸新町)は、昭和二十九年十二月冬期合宿を北アルプスの穂高岳で行うことを計画、石原一郎氏をリーダーとする十二名の隊員を同地に送り、奥又白(標高二千五百米)にテントを設営した。

そして、三十年一月一日、石原(国)、若山、沢田の三名が前穂東壁に挑み、翌二日訴状のような事故を引き起した。事故後、残りの両君はショックのあまり登る意欲を失い、そのまゝ、救援を待ち、翌三日救出されたが凍傷にかかり、沢田氏は足指三本を切断した。

原因をめぐる紛争

ザイルは登山家の命の綱である。しかも抗張力一〇三〇キロの

偽造ナイロン・ザイルが切れたとあって、いろいろと話題を呼んだ。ナイロン・ザイルの欠陥に対する声と使用者の不注意を指摘する批難がその中心だった。

すなわち「そのような悪いザイルを売るとは何事か、原因を徹底的に究明する必要がある。」(朝日新聞)「息子は新製品のテスト台になった。」(墜死者の実父若山繁二氏)や「ナイロン・ザイルがそんなに弱いはずはない。おそらく一月一日の夜寒くて足をバタ／＼させ、足にはいている鉄のカンジキでザイルをふんでいたのでないか。初心者にありがちな失敗である。第三者のみでない所で起った失敗であるから、当事者は出来るだけ罪をナイロンに帰せよ」とする気持もわかるが、(早大助教授関根吉郎氏)といったものである。

石原国利は、ザイルの切れたのは使用者の不注意からだ、という批難に対して強く立ち向った。「ナイロンザイルは確かに切れた。」と主張しつづけた。そして皮肉にも石原は、そのことによって関係者に疑いの目を向けられる結果になった。石原はウソを言いふらして、メーカーの信用を傷つけ、登山界や一般社会を混乱させようと

しているのではないかと、あるいは石原がザイルを切ったのではないかと、という疑いだった。この疑いはマッターホーン事件(アルプスの名峰マッターホーンで、七名の登山家中、先頭からの四名がザイルが切れて墜死した事件)や「死の断崖」でも明らかのように、充分予想されるものではある。

実験では切れない

かくて、こうした事情を検討するため三十年四月二十五日、ナイロン・ザイルの強度試験が、ナイロン・ザイルのメーカーである東京製綱蒲郡工場で、阪大教授篠田軍治氏指揮のもとに行われた。結果は「ナイロン・ザイルは、遭難現場の状況では切れない。」「要するにザイル使用の誤りということだ」というものが判明した。というものであった。

この公開実験の結果により、石原はより一そう不利な立場に追い込まれてしまった。

しかし石原も負けておらず、「被告人(篠田教授)はナイロン・ザイルが鋭い岩角に弱く、告訴人(石原国利)の発表した状態で切断するものであること、したがって告訴人の若山五朗の死因はナイロン・ザイルの欠陥によるもの

との発表の正しいことを知りながら、被告人発表の条件と異なるエッジの円い岩角を用いて前記公開実験を行い、参観者にナイロン・ザイルは鋭い岩角に対しても麻ザイルより数倍強いとの事実を反する認識を与え、もって告訴人の発表に真実性なく告訴人が虚偽の発表をし、切れないザイルを切れたとし、若山五朗の死に対しても容疑を惹起させ、告訴人の名誉を毀損したものである。」として名古屋地方裁判所に告訴したものである。

これに対して篠田教授は「これは工学部の実験の結果、でた論文で学会に報告しただけである。これが学会の席上、問題になるのなら話もわかるが、名誉毀損とはおかしい。」と反駁した。

使い方に反省の色

そして昨年の暮この告訴は、受理出来ない旨名古屋地裁から言い渡された。これは告訴人の言ったことはウソであるとか、被告人のした実験は不正であったとかの問題は一切ふれず、前記のような事実があったとしても、それは名誉毀損の疑いあるものとして裁判を進めるわけにはいかない、ということである。名誉毀損以外の名

誉毀損以外の名

誉毀損以外の名

そして山岳界も、この事件には最初から非協力だったし、最近では「麻ザイルの時代にも山登りの犠牲は沢山あったが、慎重にザイルを二本使っていた者はみな助かっている。事件当時は確かにナイロン・ザイルに対する信頼は大きく、したがってショックも大きかった。今でもナイロンを使っている人は沢山いるし、麻ザイルを使っている人も多い。要するに登山定石に従って、危険な所ではザイルを二本使って慎重を期せば、解決されることではないだろうか」というように、登山家の常識によって問題を解決する方向に流れているようだ。

そして「亡くなられた若山君は気の毒だが、他の者にはよい参考になった。若山君は、いわば尊い犠牲だ。」という声も耳にした。

